2021年度　学校評価総括表　　伊丹市立鴻池小学校

教育目標	ひとみ輝き　笑顔あふれる　鴻池小学校　　−「やってみよう！」と言える子どもを育てる−
重点目標	〇児童・保護者・地域に愛され信頼される学校　　〇自己有用感を高める児童　　〇協働体制を築き変革を遂げる教師

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	基礎基本の徹底と授業改善	①基礎的、基本的な知識・技能を習得する ②授業力の向上に向けて校内研究会を実施する	・算数・国語の基礎基本の力をつけるため、朝学習を実施する ・宿題や自主学習等の課題をやり切るよう支援する ・校内授業研究及び公開授業を定期的に行う ・教員が普段の授業を参観し合える環境を作る ・児童の実態に応じた授業づくりを行う	・朝学習実施率100%を実現する ・児童および保護者アンケートから「課題取組達成」について90%以上を占める ・校内授業研究会を年間4回の実施する ・教員アンケートから「教員に開かれた教室になっている」について90%以上を占める ・教員アンケートから「授業改善に努めている」について90%以上を占める	A	・朝学習に関する教師アンケートの結果（実施率100%）から、学習時間の確保及び実施についての意識ができている。ただし、朝学習の内容については、引き続き充実させていく必要がある。 ・「課題取組達成」に関するアンケートでは、児童、保護者ともに90%以上を占めている。 ・コロナ禍の中でも、安全対策を施して校内授業を進めることができた。また年間計画通りに実施（4授業）することができた。 ・開かれた教室に関する教員アンケートでは、84%が開かれていると答えており、さらに他教室に入りやすい環境づくりが課題である。 ・授業改善については、教員アンケートにおいて97%と高い結果となった。また、児童アンケートでも、「授業はわかりやすい」が88%、「教え方を工夫していましたか。」が89%」と90%に近い評価が得られた。	・朝学習の内容について、各学年で共通理解を図り、基礎基本の定着が徹底できるように改善を図っていく。 ・宿題や自主学習等の課題内容については、引き続き児童の実態に応じて充実させていく。 ・来年度の校内授業研究会も、引き続き年間4回とする。（市内研究発表では3授業実施） ・「開かれた教室」については、学年・学団を中心に授業をお互い行き来できるような環境づくりをしていく。 ・授業改善については、本校の研究内容と児童の実態をふまえて指導をすすめていく。教材の取り扱いや指導の在り方など、各学年で共通理解をしながら取り組んでいく。	・朝学習の取り組みが定着してきているので、内容について基礎基本や新しい試みを取り入れる等、質が向上するように取り組む必要がある。 ・自主学習は大切な取り組みであるが、自主学習の意味をしっかりと子どもに伝えるとともに、ときには課題を与えるとか、頑張ったところや注意するところを評価することも大切である。 ・良い取り組み方をモデルとして示すことも「何をすればいいかわからない」という児童に効果的である。 ・教員同士が授業を見せ合い、学ぶことによって指導力を高める取り組みをされていることは素晴らしいことである。教員によって、授業力に差が出ないよう授業改善に引き続き取り組んでほしい。 ・学校全体、学年同士のチームワークの高さを感じる。学び合う姿が子どもたちの学力の向上につながると考える。
	学習意欲の向上	③児童一人一人が「自ら学ぶ授業」、「わかる授業」および「個に応じた授業」を実現する	・学ぶ意欲を持たせるために課題設定を工夫し、話し合い活動を取り入れた創意工夫のある授業を行う ・ICT機器を効果的に活用した授業を実施する	・基礎基本の力をつけるための取組を学年単位で実施する ・児童アンケートから、「教師の授業の工夫」や「児童自ら学ぼうとする意欲」について90%以上にする	A	・「教え方の工夫」については、児童アンケートで89%の好意的評価が得られた。 ・児童が主体的に学べる授業づくりに向けた教師の意識が高まっている。 ・児童自ら学ぼうとする意欲については、中間アンケート時より増加し、目標値（90%）に近い評価を得ることができた。 ・状況に応じてタブレット端末や書画カメラ等のICT機器を各教科や教育活動で活用することができた。また、端末活用に向けた研修をおこなうことができた。 ・タブレット端末の活用について、それが目的ではなく手段であることをより意識して授業に取り入れていく必要がある。	・ペアや班での話し合い活動を工夫して行い、考えを伝え合う場を多く設定する。 ・学習後に自分自身の学びをふり返る時間を取り、次の学習への意欲向上につなげられるようにする。 ・児童がより意欲的に学べるような課題設定をしたり、ICT機器を効果的に活用したりする。 ・教員に対して、授業におけるタブレット端末活用に向けた研修を引き続き実施していく。 ・授業におけるタブレット端末とノートの効果的活用を意識し、“紙”と“デジタル”のブレンド型授業を目指す。	・「わかる授業」を最優先に子どもたちが意欲的に学習するために、課題設定やめあて、ふり返りを大切にした授業に取り組むことが大切である。 ・教師が教材に興味を持って取り組むことで授業力の向上につながると考える。 ・今年度のICT（zoom）を活用した授業には、双方向の授業など、先生方一人ひとりの取り組みに大変感謝している。 ・ZOOMを使った小グループでの話し合いなど、様々な機能を研修していくことが求められている。
		④読書活動を充実させ、自ら学びを探求する心を育てる。	・図書館を開放し、いつでも本を手にすることができる環境を整える ・家庭との連携を図り、家庭に於いても読書をする時間を確保する	・週1回の朝読書の徹底を図る ・児童及び保護者アンケートから「自ら読書をしようとする」について、80%以上を占める	B	・朝読書の実施については、教師アンケートでは94%になっていることから、概ね実施ができているといえる。 ・「子どもが読書をする機会の増加」については、児童アンケートでは目標値（80%）に近い評価を得ることができた。ただし、保護者アンケートでは家庭の読書をする時間が中間評価よりも減っていることが課題として残っている。	・図書館の環境整備の充実を工夫し、児童が「読みたい」と思える本を取り入れるようにする。 ・委員会活動を通して、読書推進活動の推進を図る。 ・図書ボランティアの活動を再開し、読み聞かせなどの活動を進めていく。 ・今後も引き続き、読書活動における啓発活動を各家庭に対しておこなっていく。	読書ビンゴやおすすめ本の紹介など、学校の取り組みにより読書量が増えている。保護者を巻き込んで家庭での読書を増やすことが課題である。 家庭での読書が少なくなるのには、テレビ、スマホなどの要因によるところが大きい。家庭で親子読書や低学年の子どもへの読み聞かせなど、家庭学習での取り組みが必要である。
	特別支援教育の推進	⑤個に応じた支援計画を立て適切に実施する	・支援が必要な児童を中心に校内で共通理解を図り、より適切な対応や支援を行う ・特別支援学校との学校間交流を行う	・ニーズに応じて、組織的な支援体制を構築する ・学校全体で共通理解を図れるように、年2回以上の交流の機会の設定する	A	・研修会を年間2回実施し、配慮が必要な児童や、その支援方法等について職員全体で共有することができた。 ・学校間交流,校区間交流は、制限のある中で手紙やDVD交流を通して実施することができた。	今後も研修会の中で、児童の実態把握や支援方法等について職員で共通理解することを継続して取り組んでいく。 ・情報交換したことが生かされるシステムを構築し、教職員全体で子どもたちを見ていく意識を高める。 ・交流については、引き続き特別支援学校と相談しながら実施内容について検討していく。	・支援を必要とする児童に対する理解を深めるとともに、支援を必要とする児童への対応スキルを高めることは大切なことである。 ・支援学級の児童数が増加しているが、一人ひとりの児童理解を深め、一人ひとりに合ったきめ細かい支援が必要である。 ・支援学校との学校間交流については、一人ひとりの子どもを大切にすることにつながる。コロナ禍であっても可能な範囲で交流することが大切である。
豊かな心・健やかな体	生活指導の対応	⑥生活指導月間目標について、学校全体で共有を図る ⑦いじめの未然防止、早期発見、早期対応に取り組む	・委員会活動との連携を図り、児童が主体となり生活目標の達成を目指す取組を行う ・児童の実態把握に努め、職員間での情報共有及び組織的対応を行う ・いじめアンケートや児童アンケート等から、学級が安心できる場所であるか実態を把握する	・児童アンケートから、「月間目標達成に向けた意識の徹底」が80%以上を占める ・いじめアンケートや児童アンケート等の結果を基に、教員全体で実態把握及び情報共有を図り、適切な対応を組織的に行う	A	・生活目標の意識については、目標値（80%）を超えていることから、意識して生活する児童が増えたといえる。 ・問題行動の未然防止や早期解決に向けて、月に一回の児童の様子を話し合う場の設定や、いじめアンケートを活用した指導をすることができている。	・児童発信でよりよい学校づくりができるよう、委員会活動と生活指導との連携を図っていく。 ・生活目標を意識した指導や、いじめの未然防止につなげていく。今後も引き続き児童の実態把握や職員間での共通理解を図っていく。	・子どもと教師が一緒になって学校づくりに取り組んでいるところは素晴らしい。さらに一歩進んだ取り組みが必要である。 ・いじめの問題については、何よりも子ども理解に努めることが大切である。 ・学校内においていじめ問題が無いのがいいが、起こったときに教職員がその問題に真摯に向き合い、問題解決を図っていくことが大切である。問題行動でも同様である。
	道徳教育の充実	⑧心を耕し、心を育てる道徳教育の実施	・全教育活動を通して、子どもの自己有用感を高める取組について指導及び支援を行う ・考え、議論する道徳に向けた授業改善を行う	・児童アンケートから、「自己有用感が得られた」ことについて80%以上を占める ・各学年に応じて年間指導計画を作成し、よりよく生きる子どもの育成に努める	A	・自己有用感に関連する児童アンケートでは、目標値（80%）を大きく上回ることができた。また、教員アンケートにおいても、関連項目評価が90%を示しており、教員が児童の自己有用感が高まる指導及び支援を意識しておこなうことができたといえる。 ・道徳科授業に関する児童アンケートでは、授業に対する参加意欲が90%に近い評価となっていることから、授業改善が日々の道徳科授業に生かされているといえる。	・あらゆる場面において、児童が自己有用感を高められたり、自尊心を感じられるがような取り組みを教師一人一人が意識し、子どもたちを認め、励ましていく。 ・今後も引き続き、「考え、議論する」道徳科授業の実現に向けた研修や、学年でおこなう教材研究等、積極的におこなっていく。	・子どもたちの人の役に立ちたいや認められたいという自己有用感の高まりを感じる。そのことを通じて、自分に自信が持てる自尊感情を高めることが大切である。 ・日常的に認めること、思いやること、耳を傾けること、思いを発信できることなど、学級での取り組みが子ども一人ひとりの自尊感情の高揚につながる。 ・子どもの心を耕す道徳の授業に引き続き取り組むことが大切である。
	健康教育の充実	⑨自ら進んで体力を向上させようとする児童の育成	・委員会活動との連携を図り、児童が主体となって、外遊びをする取組を行う ・体育科授業の充実を図る	・児童アンケート「外で元気よく遊んでいる」で、90%以上を目標にする ・体育科の授業で、子どもの体力向上に努める ・「朝食を食べている」について、子ども及び保護者アンケート共に、90%以上を目標とする	A	・児童アンケートでは、体育科授業を通して体力向上への意欲が90%に達しており、児童の授業に対する意欲が高い。ただし、業間での外遊びについては、目標値に達することはできなかった。 ・体育科授業において、児童の運動量を確保した授業づくりを意識し、子どもの体力向上に努めることができた。 ・サーキット運動を取り入れて、いろいろな種類の運動をする機会を設けることができた。 ・朝食に関する児童、保護者アンケートともに目標値（90%）を超えており、朝食を食べる習慣が定着されているといえる。	・今後も引き続き、体育科授業の内容について、学校全体や学年単位で授業の取り組みについて交流し、体を動かすことに対する児童の意欲向上や体力向上に向けた授業改善につなげていく。 ・引き続き、PTAと連携を図りながら、「早寝、早起き、朝ごはん」等の生活習慣について意識を高めていく。	・休み時間に、教職員が子どもと外で遊んでいる姿をよく見かける。授業で見せる顔と休み時間に見せる子どもの顔を知ることは大切なことである。 ・いつもいつも外遊びではなく、「週に何回かは外に出て遊ぼう」という先生の声かけは大事なことである。そういう外に出るきっかけを作る必要がある。
開かれ信頼と	情報開示	⑩積極的な情報収集と適切な情報発信に努める	・学校通信やホームページ等を活用して学校の教育活動や、児童の様子等を定期的に発信する ・災害による休校等の情報を発信する	・保護者アンケートから、学校情報の発信についての満足度」について90%以上を占める ・状況に応じて、休校や学級閉鎖等の学校情報を発信する	A	・保護者アンケートでは、ホームページ等関連の満足値がほぼ100%に近いことから、情報発信の充実が図れている。 ・ほぼ毎日ホームページを更新し、学校での様子がリアルタイムで保護者が知ることができるように配信することができた。	・引き続き、高い頻度でホームページを更新していく。	・学校だよりやホームページでは、コロナ禍で参観などが制限されている中、学校での子どもたちの様子を知ることができた。 ホームページをこまめに更新されていて校内だけではなく、校外や地域にも開かれた学校となっている。 ・学級閉鎖や学年閉鎖の際にも、積極的に授業の配信を行うなど、取り組みに対して感謝である。
	安全・安	⑪新型コロナウィルス感染症防止に向けた対応の徹底を図る	・全ての教育活動において、新型ウィルス感染症防止に向けた対策について教員で共通理解を図り、対応する	・児童および教員アンケートから、「感染症防止対策の徹底」について90%以上を占める		・児童、教員アンケートともに、「感染症防止対策の徹底」に対する意識がほぼ100%に近い評価を得ていることから、日々の学校生活において意識が高まっているといえる。 ・感染状況に応じてコロナ対策委員会で確認し、感染対策を講じながら教育活動をおこなうことができた。	・今後も感染対策を講じつつ、教育活動に応じて、開催時期、開催場所、開催方法などコロナ対策委員会で確認しながら実施していく。	・新型コロナウイルス感染症対策のためにリアルな形での授業参観はできなかったが、ZOOMを活用した授業参観や学級懇談会に取り組んだ。 ・終息の見えない新型コロナウイルス感染症への感染防止対策を実施しながら、学校行事や校外学習、体験活動など実施することが子どもの成長にとって大切である。

される学校園	安全・安心な学校づくり	⑫非常時における学校の危機的管理体制の充実を図る	・どのような非常時にも適切に対応できるように、教員で共通理解を図る ・安全管理点検を月１回実施する	・状況に応じて、適切に対応できるよう、避難訓練を計画的に実施する ・児童にとって安全・安心な場所であるようによりよい環境整備に努める	A	・避難訓練に関する児童アンケートでは、96%の児童が状況に応じた行動を意識していると答えており、避難訓練に対する意義を理解して取り組むことができているといえる。 ・コロナ対策を行いながら避難訓練を毎学期取り組むことができた。 １学期・・・火災（学団ごとの避難） ２学期・・・不審者対応（職員研修） ３学期・・・震災（全校一斉） ・月に一回安全点検し、危険箇所の修繕をおこなうことができた。	・引き続き、避難訓練の意義や状況に応じた行動および避難経路等の確認等をおこなっていく。 ・コロナ対策をしながらも、実際に近い形で訓練に取り組めるように工夫する。 ・安全点検を引き続き行い、危険箇所を確認・修繕していく。	・実際の場面を想定した防災訓練や避難訓練を通して、自分の命は自分で守るということを、子どもたち一人ひとりに意識させることが大切である。 ・登校時の見守りを繰り返す中で、放課後に遊んでいるときでも声をかける児童が多くなり、地域と子どもの関係づくりが進んでいる。
	教員のワークライフバランス	⑬教職員の適切な働き方を推進する	・PDCAサイクルによる業務改善の実施をおこなう ・定時退勤日を週１日設定する	教員アンケートから、「ワークライフバランスの意識の定着」について80%以上を占める	A	・教員の働き方に関する教師アンケートでは、ワークライフバランスの意識について目標値（80%）を上回っており、管理職のリーダーシップの下、業務改善を行う意識が高まっているといえる。	・行き続き、行事や会議の精選、また仕事の内容についても再検討をおこない、より業務改善ができるように学校全体で取り組んでいく。	・先生方の業務改善を進めることにより、子どもと余裕を持って向き合う時間の確保につながる。

No3

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った

学校関係者評価総括

・終息の見えないコロナ禍ではあるが、先生方一人ひとりが、「学びを止めない」取り組みを行っている。ICTが得意な先生もそうでない先生も、学校が一つになって取り組みを進められている成果を見ることができた。全ての先生に「まずは、やってみよう！」という意識が浸透していると感じる。学級閉鎖やが学年閉鎖時の授業配信や普段の授業でも、休んでいる子どもたちのために配信だけではなく、リモート授業にまで取り組みを進められた。子どものために「何ができるか」と、ピンチをピンチとして捉えることなく、変化にチャレンジする先生方の前向きな考えで力が結集されたと感じた。
・来年度の市内の研究発表会に向けて、学校が一丸となって取り組まれるよう応援しています。

次年度に向けた重点的な改善点

・学校･保護者･地域のとの連携と協力　・子どもの学習意欲を高める授業改善　・開かれた学校づくり　・個別最適な学びの実現　・自分に自信が持てる自尊感情の醸成・読書活動の充実

No4

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った